ル 2
3094

漂流之者共おらんだ江上り候覚

一寛延三年午十一月十七日神力丸弐百五拾石積
拾六端帆ニ而船頭文右衛門舟合揖取理兵衛水主作
七郎兵衛清文治郎佐六宗次郎右八人乗組
浅草五郎右衛門浦出船仕候ニ付清目加藤清之助
東国より江戸へ志摩国積出之下り候所々
紀伊国山より下り是迄様仕候而同様仕候日和見合
六月同日出船仕上方へ罷出候中ニ而四方之風吹候へハ
より難風大吹候故風波高く成候ニ付右方へ相成候風
申酉ノ方より吹募り候ニ付難風ニ而漂候ニ付一向ニ不
叶帆柱も少し吹流され候ニ付大波打込候ニ付
船中人々共帆柱切捨候ニ付舟共打候

時ニ和州ゟ帰帆之処順風ニ付沖へ乗出し候処翌日ゟ荒風ニ
流罷成候ニ付舟ニ而舵損シ元船揺海へ打込垢離を取
諸神ニ祈をかけ候得共十二月ゟ沖へ汁一切無之
山も見へ不申何国とも不相分当手ニ而一向ニ荒年ニ付候
一同不安心ニ御座候所風も静ニ成候ニ付皆々相談仕候
帆柱も力ニ任申酒を喜共々拝ミ帆八端を揚
是力の限り帆を揚候得共是ニ而も日々何日比ゟ南部
付難風ニ逢ニ而揖を取候ニ付き是ニ至り候得は痛ミ
中へ而も去る年十二月晦日ニ至り合船水丸
来り候ニ付去ル正月八日ニ而も一同ニ而ほとんと
ニ而も悉鍋（渇カ）を合付候ニ而漸々是非汲水ニ而不漸
咽を潤し有之候ニ付其体脈膚焼中ニ而

其ゟ揖は不叶候ニ付上結垢離をとり諸神へ
祈かけ候ニ而寧飯理ニ而濡船精進ニ相成候ニ付最早
水之儀者或は波水合候ニ付不叶足之漸々曇り
雷ニ而金を御座候右雨水樽へ溜候ニ付尤難儀
其上是迄ニ而仕舞ニ者是れも不揃ニ而右水を以
御取替ニ而此者ゟ雨漏へ是之ニ而候得共
其後は猶もの無く候へ共毎日振立呑付申候
尤食物も無之干鯛すかし鰹節右なとを以漸々
命を凌き候処二月の末比曇ニ而是付候処二日午節ニ船ニ夜ニ
節分之文取候ニ而漸く仕合候ニ付ニ而帆柱を縄ニ而
一同ニ而是を一番乗手ニ而舟ニ帆柱ニ而
櫓ニ而押流され舟ニ相揖も無之漸く遣し

こゝな同船ニ乗来る阿蘭陀人ハ文政九年上りしゆへ
何ヶ所遊覧を拝見致神へ同船一同ニ一所ニ三月二日
七ツ時西の方に当り山見へ申候ハ其ゟ山々と存候ニ付其儘
船山ヘ乗よせんと同船一同申合力を尽し漕廻り
出帆いたし候所翌晩比右の山ニ寄候様存候而縫ゟ長
山まで漕寄候処ニ御座候而南ニ當り阿蘭陀船と相見へ候ニ付異数
艘相見へ候ニ付力を尽し漕寄候ハ帆を揚け候ニ付候処
相見へ候ニ付日本國と内上方弐海里ほと漕寄候ハヽ
夫ゟ阿蘭陀船ニ乗候所ニ付候船ニ而おくれ出帆ニ付帆
唐船と存候而帰立相図致候得とも入津ニ不及取掛見候
日本國之内ゟ致候方の出船ニ而又其日出帆と思入
其ゟ其日より其後ニ金助中ハ及八人相計壱艘

相合金之助并ニ及候所五輩帰候て漂流致候ハさんぎりは
存候處其上ニ月代ハ生ぬき有るを阿蘭陀船ニ而存候ハ
其ゟ又阿蘭陀船一艘乗近く其ゟハ又其のまゝ
其外其外と近く其中候金之助并ニ相成其中ニ入
一同の詞無之候又ハ其乗に候を其まゝ相当候人ハ
相成る其を存し人其人ニ参り候右何ニ参り候而も通し
不申候由ニ付其上金之助を合申候処と申候見世候人
向の者ゟあつまり申し右阿蘭陀船ハ其内の者ニ相摘入
茶を致入候処おゐて茶碗ニ入さて其後相渡世候人申し候而
礼を申に取ゟ下ケ見せ候へ共其後の陽行方ゟ相成
其后嘘を下ケ見せ候へ者指さしゆいし見る奥へ
参り候所ニ而数人の相手まで見え候数の者乃有之候

一艘見へ候由申来ニ付浦々見へ候方へ走り廻り候ニ付
文化十三子年唐人上り候ニ付浦々ニ而井戸も見へ
候ニ付井戸ニ而水汲申候
右水汲候者ニ付見へ申候由ニ而申ニ付三月廿日頃ニ候
ニ而唐人上り候ニ付見へ申候唐人共相尋申候处
唐人大勢居申候ニ付唐人共ハ何も無之候ニ付唐人共
強く居候者ニ付文字書付上申候人大勢来り食物求め
中々腹半空ニ而腹へ申候ニ付候ハヽ唐人共ニ付
見せ申候人ニ一両人ニ付入冷合候ニ付候ハ古人共
其外唐人共ニ付候ニ付唐人共ニ付申候
乗人共ニ付唐人共ニ付申候ニ付唐人共ニ付唐船
福州より参り候者ニ付申候ニ付役人と相見へ

唐人共ニ而無殺害致し船ハ大船ニ而唐人共
私共船ニ而船ハ横船ニ而候ニ付私共船
見せ申候ニ付時分ニ付申候ニ付書申候ニ付唐人共
何の事ニ候哉と相尋候福州より申候ニ付唐人共
入り申候ニ付私共船ニ付申候ニ付役人共ニ大勢乗来
乗組人数何の船ニ付申候ニ付唐人共ニ付
相尋候ニ付私共送り申候ニ付文字ニ而申候ニ付
申候日本國南部盛岡領釜石村白濱之船と
候ニ付唐人真文字ニ而書見せ申候ハ唐人共讀
何事ニ而書見せ申候唐人共明白上山と申所ニ讀申
申候船ニ而上り申候ニ付安徳ニ付唐人共ニ付
唐人共ニ付文化十三年薩摩大丸ニ付

計百文払ふ事なりとは諸入丁百と申は漆人へ入る所への
振舞唐人も大概之所も其役人共ニ刀
さけ下々下役人の振舞唐人へ出ス人之拝する者共に
唐人来る人ハ入るには終る毎朝舟く諸人見物する者
見ニ来所ニ而見る者ハ肉ハ右之通ニ而右之通と飲
供物まて大根一豆腐木耳細ニ切て大根ニ三月ニ而鍋
振舞之儀ハ右之通ニ而御座候細ニ切て又右之
肉を煮申候人陸より右之通ニ而
之振舞ハ右之通ニ而右之通
米粒細ク長くして赤米ニ而候故ニ而日本の
焼米を振ふて候ニ而候　味噌ニ而候味
右ニ而候大根ハ嵐大根ニ而ハ右之嵐之尾乃

一　細き尾付ハ尾ニ而候味噌ニ而候
沙糖豆腐胡椒ニ而沙糖ニ而候　赤漬
大根を細ニ而赤大根漬又漬ニ而味噌之
此外ハ豆腐之外ハ　山椒之類ニ而味
御座候人参細く切て筆蕨塩漬海老
すき鮑之右之形味も御座候大根
かし平めハ右之味噌ニ而黒く赤み
鶏のことくして味ハ甘ク日本の味噌と違ハ汁ニは
あらず常の汁と違ひ文字ニは
又ハ鶏之味御座候ニ而小唐人ハ
塩ニ而ハ焼申候ニ而候
ハ塩ニ而ハ甚細ニ小豆へ

さとの池入ニうんの住加西砂糖屋　柿の様加西砂糖漬
核ハ常の羅抱黄梅千砂糖屋うんかんかうん沙文氷砂糖
柿のことく
まて梅菓子二品合せ葉ハ前のことく
右一籠ニ持ち七八寸位の四ツ谷ハ宝形ニ下ノ人右十
二葉ニ而持ち来り香ひとかおすふり之かくしせこん相見
申候六人ニ而銅桐律あ人出路ニ而日津を良人へ恐見て
戸を通ニ而是ハ日津庄人ニ而相不相見ぬ人らん忍ひ来る
彦重をつかひ其をもつかくれ候の日数の扇十被成
往補まて　別に庭に其ハ松其花候ハ笑まかへ文横ハ
三其ハ西南ニ掛物さし是ハニ去而切石ニ其其ニ去り上けり
笑ゝ面文是ハ花ニ而ろうかんりや井戸ハ心をかけ人ハ中なと梅之面
其し六人丸様中仕取すおらしあ人ハ掛ま之かやい一礼相済

船人子役
一　右福州の湊ニてつかりの湊まて凡そ着候ハ
一　三月九日出役人とおなして唐人通事常之乍人下役
大勢人足ま丈取光荷物共役陸へ上ヶ申候是ハ蔵へ入と
い事蔵方へ指さし申尤おの認物ハ拵蔵へ申候仕
尤右役取合掃其より是れ取光中將取事ハなきも二ま見
方の船くれ安くも船附を荷ハ三月廿六日文出役人唐人
あ人借おしんまて来取合上て私まで船付其取合上申候ハ
宮の其より二宮二人取を続荷ハ取あ人ハ取を
上りはやの宮の船加下人入年中ハ此所ニ額足り荷
神ともやか定の由の様ハ去り相ハ　此所を
常ま人荷ハ下先足て申ハ此所まて荷衆人々を人出竈を棄

印ヲ請候得ハ持来候手形ヲ以荷物持来候節ハ
此使ヘ渡し荷物持来り申候得者格別ニ相改メ
其上ニ而荷物ハ渡し候手形ヲ以請取候様ニ
手形出シ不申候而ハ内証ニ而買取候儀ハ無之候
拝見之上拝借申候ニ付拝礼いたし出島へ参り拝見仕
候儀ハ振舞ニ相成候共 何方之者ニ而も拝礼
之儀ハ諸役人罷越候 唐人共ハ出島へ罷越
三月十五日より四月十五日迄ニ出帆仕候由 尤役人
人数ハ来ル年ニ番人道具ヲ指遣シ東ニ万人指出し
候儀ハ其船ニ出船いたし候 唐船之儀ハ
送り船ニ而罷越候役人共ハ船ヲ見送り申候
船ハ日和次第何方へ成共出帆仕候

一 当所ハ南ニ向キ申候ニ付此所大小役人召連レ候て唐船
出帆之節ハ宗法人大勢罷越見送り申候 唐船之
出船いたし候得ハ港口迄送り申候 船ハ一艘
毎年三月四月ニ毎日罷越候由ニ御座候 三月
中旬ニ其所へ出 式相済候て船より上り申候
何れも参り候 生其渡し候て あち方船底
阿蘭陀船ハ上り候へハ 通詞二人御道上り候ニ付此所ニ番
陸上り候ニ付 阿蘭陀之慶門より唐人ハ其法ニ従ひ
唐船ニ出役いたし送り船ニて入港いたし候
広東船ハ 諸構之船ニて 唐人とも 附添
其役人ハ役目之唐人共船内ニ而 御用之節
唐人上り候ニ付 捉所ニ而 御改之上 当所表大門

夫ゟ唐寺へ参り候処門内ニ而御座候而表門
外ニ庭御座候処右方ニ唐人ハ大勢出迎御挨拶
致し申候処左右ニ唐寺ニ唐人三人宛居候書物持参
不申候得共左様之事ニ承り申候ハ其外右之通り
漆之器ニ而其外文隣出役〆出役人共六人宛参り候処
唐人と御対面致候右御尋之趣申聞候処右之通り
出申候処上申候ニ付唐寺之人参り候処ニ而此寺之
役人共ニ相尋候処此寺之唐人居候所ハ仏前之由六人居候ニ付此寺之
名ハヘイシユンと申候由此寺ハ仏檀ニ御座候処ニ而
而ハ如来の御宮飾候処此寺ハ世人参り候之事ニ而
竈御座候処華表之処ニ唐人参り候処ニ而卯月唐寺之
御座候文字ハ申ニ付此寺之間卯月廿日ゟ此度ニ而

黄人之其人ハ先付之居候間此月廿日ゟ此度之所ニ而
或日大明福州府ニ此山ニ崩候而右之人参り候
文字之人茂寺ゟ小ノ方ハ南之日本の仏法ニ而
中程ニ参り候人ハ大切なる事ニ而後ハ大山崩ニ海ニ出候
唐人大黄檗奥足曽の御尋之御座候而大切之事
未だ日本ニ而御座候事ニ而右之唐人衆
大明之御代ニ而右役人之御尋之事ニ而候
伊也扉ニ而此六人之御座候前日之通り
龍之付候大猿之事ニ而之人ニ而師の
上申ニ付候而右衛門ニ而同理之事ニ而
八月廿日二度御尋之義ニ御座候而
唐寺之役人衆ハ申上候之事ニ付役人衆

是ハ與力衆ニ唐人より差遣候の上ニ而医師某人より添
煎じ見候薬一包差上申候、此大病ニ而用ひ候右薬ニ而
之を服候ニ付、下役人共へ申付候へハ、用ひ候ニ付御座候
所、何とも不申候ニ付、其後差付候様申付、又同月十二日病死
仕候、依之右之通り申上候ニ付、唐人共へ申付候處
を相果申候ニ付、唐人共ニ被仰付候て、悟真寺へ御埋葬
右唐人の墓所ニ付、唐人共より石碑を
建立申度由申上候処、右墓之儀日本人理兵衛と
申者ニ而右石碑を建、唐人共布施石墓を建て申候
右石碑之儀ハ其墓所ニ而取建申候
一 唐門の漆大破ニ付、塗替ニ而も御座候ニ付漆
ぬり替候様被仰付候

一 五月五日菖蒲蓬を軒へ挿申候、此日ハ
粽の祝儀ニ包ニ而餘多人へ申候、此外鶏子等
酒肴等を被下候、唐人共ハ
一 此外ニ付我等手前ニ而餘程御拝申候、右代ハ福州より來
唐人共九郎兵衛へ申候
一 福州より唐へ参候、日本の海上ニ而百里余ニて
一 同年同月廿八日又此役人唐人ニ而、日本国へ送り
中國より船仕候、唐人共我等を差遣し申候、高秋
舟を仕まて大船ニ仕候、我等を取、村田役人唐人二人
同船仕候ニ付、六月初旬ニ長崎ニ着仕候、六月
出帆申候由申上候、六月より同月晦日ニ候
まて相勤候て差上申候、薬を此役人猪...

申ニ六月十三日寧波ヨリ湊ヘ着岸致し候ニ付役人共唐
人附添南部領伊兵衛儀上ミシカウクと申唐人家
へ召連レ罷在何ヶ月程相立候所其後より日本
通詞の唐人と申ス出役人唐人共信公儀へ相願
候得ハ何卒日本へ何様ニ而も帰りたく其方志願ニ付いと
相尋申ニ付日本国南部領釜石村白濱ノ者ニ而
商物積ミ罷越候所去ル十一月此方出帆
申候所途中ニ而難風ニ逢ひ不意ニ福州と申所へ漂着
仕候由申ニ付右提所へ参り候所福州唐人共信公儀
無相違三人共ニ其後右之者共ハ子細申候ニ付右提所
相手廣門ニ而無之ニ付返事無之候得共未だ定
出役人唐人附添居候福州唐人ニ而無之候

一 信公儀と申者南京人ニ而此度唐湊へ清国より参り候
相手ニ而見申候所番所へ参り候所ニ而付添相見へ
申候ニ付代リ申候者共人相見へ相尋候得ハ右信公儀
へ其所ニ而無相違申候ニ付ても私共者共無
相違候ニ付信公儀役所へ二部申渡候一部ハ女中
共ニ相渡し候女ハ文字ニ而申候ニ付無相違相渡申候
一 信公儀へ志の何卒申候ニ付右之趣相渡申候
前書申上候通無相違候以上
一 此所ニ而役人共両人方へ渡し申候ニ付此方へ相尋候
申迄自分ニ而仕候
一 六月十三日より十一月六日迄右寺より生寺もおき寺
此者右候寺之方ニ而候人ニ付候住寺ノ名ハヘヒシエシと

中には此外人形子を出し候て何方も出申候ものなり
尺ハ申には
一 或時阿弥陀寺にて本通町之通に候故法塔尺申には此塔
七階にて上ハ九輪もつき瓦にて棟の形も見るより候ての
高札掲申には格子にて階に階子ある上り申には二丈十四五丈
唐ハ十間四方程ニおよひて四方ハ宮も候故七階ニ縁
の様な物出付候て四方共も付申には御中ニ本堂経向ふ也
中には堺ハ此様に
一 堺の上ハ尺申には郡に大分広く国の内に在り申程
山ニ一通ニ尺ハ申には二云町続くさのミ広くおよひて申には
安芸広島ニも此中ニ尺申位にも出申候およひて
一 或者には寺々十丁町程東ハ町を通て東には二云本町には

尺申には東通町に此所前々よりありて右出町より候
一 唐国と云人形に坊主にて本寺に掛物を法然上人と云
絵にて法然上人は三宝荒神に手を合せて拝み居り申には
一 上官と衣ハ三世佛と袖長く朱の法衣龍鳥獅子との
紋付申には是は唐僧と見え遠方より御渡り衣中ニ金襴也
毛氈多く手の様には皆御の先の尾にて長く以後八一つ天宮
にて頭巾の様な物の紐付と見え申には
一 衣具には上衣に海老色申には和尚高人本寺の和尚与上人
見受申候但ハ御堂よりしき物に尺申し下人足
と或者に是もあり候以後には上に然ん或は毛氈を
敷申には
一 かやハ草にて大きく細く切申の枝を立様にて付ましたかると

前之公を執りて支那全権へ掛り故ニ日本の権威殉す
ハ無之候ハ
一家を作ルにも石ニて候ハ壁を土元塗り練蛎殻(カキカラ)灰を入て
箱へ入并板張く事ハまゝを柱ニ用ハ作立て候日本
の土蔵作りの様ニ御座候
一寧波の湊より七百之海上唐法ニ千弐百里とも申
ことに御座候
一唐ニて茶並所ハ無之様なる　支那計ニ相変
候得ハ此年寧波大旱ニて農作一切不熟例年ニ不合ハ

巾四寸五分
高三寸五分

一候ことも出来申候ハ
一酒　一(ヒト)茶碗六文位ニ而多く赤く味よく候茶碗
八日本之常の茶碗そへたく候ハ

一此年寧波大旱ニ而年ニて所々飢饉ニ付法人へ茶差
下さんと申候又石料の米買数へ積承方御座候
茶人さま共ニ年月役人唐人と相見へて供大勢来候由有
三人ハ支那役書役差図役奉大勢ニ而寄附人大兵五
所と相付相成候ハ支那方至る七来入迄ニて外十器へ
上りしる差図ニ不及御座候
一館ハ文字大ニ書候程ハ皆福洲ニて承り候ハ
一福洲厦門寧波ニて芝居又ハ西法ニ而あるく唐人も
目々ニて不残ニ諸方之者今朝ニ手引候由御座候
支那之唐縁の形目々ニ而如此宮守ニ候ハ三唐縁ノ華
蛇皮ニて張り申候ニ三四八とも申唐人笛の様成物吹申候よし
西洋銅鑼子ニ御座候

一右三ケ所ともに通所ハ切石にて畳申候
一まわし八寸ほとなり申候形丸くして甚辛にて候文
赤色ハ唐ゟ参り申候ハ赤く上々ほと参候ハ
一右三ケ所ともに唐人共髪ハ剃申候口ノ上の髭（ヒゲ）ハ其侭
分置申候
一鳥ハ白黒と斑にして帰候ハ日本ニ無之候
一九月廿八日又船へ参候節積入申候ハ是ハ信公様
商船にて参候船共ニ申候ハ唐ゟ船頭共人と申ス〆拾壱
人参候まて十月廿六日ニ清ミ参候内〆候ニあゐ方の
参船の積込申候十月廿六日也船まて出しに参り〆候富数
五百程乗り仕候川口清ミて一船お今人数参候得共也改
申ハまゝ所ニ参り候ニ付急き走申候ハ所より参候ハ乗候ゟり

佐久会浦ゟ参りし斗まで申候ハ十二月二日日本国天草ゟ
見入申候は廿日海中ゟ唐ノ水主壱人帆縄ニすがり
胸を手ツ乃死候は
一十二月五日天草浦にて浪ニて打揚申候小判の様なる物の銘
の彫物ゆへ佐候中ニ皇賞の二字ニ彫り候付さんこ之旨を
申立候首人掛ケ所ニ大きさ三寸余人付候は天草地の唐の船
よりも七人の参人ゟ乗り参候由申候は清々に流れ候て竜牌と申
物のよし右龍牌ハ云候出申所ゟ様ゟれ上ケ申候は
一錦六ゟ七月廿日ゟ取る所ニ病気持ちにてかゝ候て
子細何の方ゟ医師参り候に付参りゟ候ハ寧波と
療治仕候右信公様ゟ手代参り候て見当也船ゟ参候も
薬人参りて候まゝあの方ゟ取持申候ハ所ニ参候中ゟ参り候病気

若年寄衆ゟ御施行被成下候ニ付十二月八日致病死
候ニ付大目付御役人衆ゟ御奉行所御役人様
ゟ長崎表へ出役ニ相成候 然ル處清兵衛儀ニ相手致
候ニ付大目付陸人ニ而差遣候 御附添ニ而持参
出來候處ニ御取扱ニ而候ニ付

一十二月十九日長崎表湊へ着船ニ付御役所より
山脇仁兵衛様御出役之上唐人共江 唐人屋舗へ
召連候處 御役所ニ付 唐人江内密御尋 其外
唐人三人被召 御吟味之上 唐人無相違 林仁兵衛殿
出役いたし白洲へ呼出し 御吟味之上 御尋ニ付
御詮議之上 大勢御出 今日之儀被仰付候
六人共ニ 御詮議之上 御渡被成候 御吟味之上

又右衛門 上様御用ニ而 難風ニ逢 御届申上候ニ而 相濟宗
旨寺ゟ御届申上候 其上中上ル 右御尋之儀ニ付
出帆之儀相改候 又唐人ニ而 宗旨之儀 御尋ニ付
上候得共 其後委細之儀 右中上ル 唐人共
能々御吟味之上 何事ニ而も 御取扱ニ付
唐人共二十人 唐人屋舗ニ而 御尋之上 遠島被
申渡候處 唐人共 乍恐 御吟味之上 遠島被
申渡候 右之儀 唐人共 中上 御尋之儀 相濟候
夫ゟ唐人共 右之通 被仰付候 以後之儀
不念之儀 上様ニ而 上ニ而 御吟味之上
出帆之儀 揚屋ニ而 御取扱之上 被仰付
其外之儀 上ニ而 二十一日二日 唐人共 帰帆被仰付
出帆之儀 二三日 過而 山脇仁兵衛殿 御出帆 久々 相濟候

居候處渥拝ニ而療業ニ御座候ニ付医師を呼出し番
人参ニ而療業大悔ニ而六人之内ニ而去正月廿日
より七月ニ相成癒ニ療業切り居七月廿日より又々九月十日
頃ニ而全ニ治り候ニ付療法茶へ而療医師ニ而
付療業ニ而御座候

神力丸残船具并残荷物請取覚帳

船具

一鉄碇　五房　一輪金　壹　一拾六端帆　壱捆

一苧縄　五筋　一船魂　一包　一細工道具　壱包

一白苧　壱包　内　斧　鉄提　鑿　鋸　鉄テコ

荷物

一唐銀弐百弐拾六匁五分弐厘
　但此代り文銀四百五拾三匁四厘

一唐銭百五拾六貫文
　但此代り文銀弐貫拾二匁四分

一鰹節　拾九包　但一包　一干鮹　拾包　但壱包　一串蚫　拾包　但壱包

衣類并小道具

一古夜着一ツ
一古脇指一腰
一蒲團接綿一ツ
一箸箱 壱ツ但箸弐膳入
一小刀 壱本
一櫛 三枚
一木綿嶋古布子 弐ツ
一木綿合羽 壱ツ
一郡内嶋古小袖 壱ツ
一丹後嶋古小袖 壱ツ
一紬嶋古小袖 壱ツ
一破蒲團引解 壱ツ

一木綿嶋古着物 三
一嶋木綿頭巾 壱
一風呂鋪 四
一同蒲團 三
一古袷肌着 四
一サシコノ肌着 壱
一小柳篭裏 弐
一錐 壱本
一呉坐 壱枚
一同綿入古羽織 壱ツ
一古夜着裏 壱ツ
一淺黄縮古袷肌着 壱ツ
一上田嶋古袷羽織 壱ツ
一青梅嶋古布子 壱ツ
一柳篭裏 弐ツ

一荷鞍 壱ツ
内 一[illegible] [illegible]釜也 壱ツ
一[illegible] 壱ツ 一珠数 壱連 一[illegible] 中[illegible]付
一茶萱篭 但チヤンカゴ也 壱ツ
一木綿縞[illegible] 壱ツ
一古黄綿 六ツ
一古花色襦袢 壱ツ
一木綿縞古財布 四ツ
一木綿古切 四ツ
一銭 百[illegible] [illegible]
一木綿古袷 壱ツ
一絹羽織 壱ツ 表紬 裏浅黄
一[illegible] 弐[illegible] 一[illegible] 弐挺 一羽織紐 壱掛
内
一[illegible] 壱本

一肌着 六ツ
一黒木綿帯 壱筋
一木綿帯 壱筋
一細引 壱筋
一白木綿帯 弐筋
一手拭 弐ツ
一古竹皮笠 六ツ
一小柳篭裏 壱ツ

一 帆縫針大小 拾弐本 但針箱入
一 小鏡 二面
一 いかき 壱本
一 木綿之箔 壱つ 但古縫入
一 〔判読不能〕 壱つ
一 苫縄 三本
一 小柳箔畫 壱つ
一 掃 三枚
一 脚絆 壱対
一 美盥 壱面
一 〔判読不能〕 壱袋
一 綾木綿布子 壱つ 但日本仕立

一 三絃 壱つ 内 絃入 並ニ なくし 壱つ 絃箱子 入 壱つ
一 古着針 弐つ
一 斧 壱挺
一 爪切

一 揚針 弐拾本
一 刹刀 壱挺
一 粒 〔判読不能〕 三拾〆
一 木綿古綱切 弐枚
一 箔 〔判読不能〕 壱包
一 挑灯 壱張
一 南京 〔判読不能〕 壱つ
一 壱本
一 繻子 なくし 壱本
一 〔判読不能〕 弐袋
一 反古 、 壱袋
一 廣興紀 六冊
一 〔判読不能〕 弐冊

一 木綿蒲團 三つ
一 黒木綿 四端
一 蒲團裏 壱つ
一 純子 壱尺
一 白木綿 弐端ト七歩
一 木綿けんちう 壱反
一 唐人古襦 八つ
一 黄木古綿 壱つ
一 古絲耳搔 九本
一 唐多色紙 拾三把
一 華巾著 六つ
一 琥珀縫文 四つ 但掛之

一 左傳 一冊
一 布 壱反
一 繻子 壱切
一 錫湯瓶 壱つ
一 唐古衣服 四つ
一 水牛掃 十三枚
一 小茶づし 壱つ
一 鼈甲楊枝 壱つ
一 毛帽子 三つ
一 唐扇子 壱本
一 太子毛頭巾 壱つ
一 絲玉 二つ

一 白玉 壱連
一 青磁香炉ん 六ツ
一 彫物本香合袋入 壱ツ
一 麻衣 壱ツ
一 唐木綿切 弐ツ
一 貝焼鉢 壱ツ
一 掃拂 七本
一 紫檀筆立 壱ツ
一 砥石 壱ツ
一 珠数 二連 内 壱連菩提樹 壱連紫檀
一 唐硯 壱面
一 唐筆 四本

一 角細工 壱ツ
一 流金香炉ん 四ツ
一 唐臘燭 壱ツ
一 唐人肌着 六ツ 但弐ツ壱ツ
一 黒檀箸 五組
一 唐墨 二挺
一 牛角香合袋入 弐ツ
一 白猪口 六ツ
一 香合同様 三ツ
一 孔雀尾 弐本
一 鼈甲櫛 壱枚
一 塵拂 三本

一 蝶 か
一 金羊角光 弐本
一 板木絵 十枚
一 幼学雑字 壱冊
一 清蒙戦略 壱冊
一 縣金辨字 二冊
一 日小壷 三ツ 内木綿袋入
一 竹緑 弐把
一 青磁瓶 壱本
一 唐茶 二包
一 古掛物 二幅 細表具損し
一 蒲団 黄ノ古綿 二ツ

一 氷砂糖 壱包
一 唐絵 壱枚
一 墨蹟 七枚
一 鳳書 壱冊
一 省菴府君行状 壱冊
一 唐焼物小猪口 二ツ
一 線香 壱包
一 唐剃刀 十本
一 木綿古蒲団 三ツ
一 滑小切 壱ツ
一 唐枕 四ツ
一 古花毛氈 壱枚

一 古烏帽子 壱ツ
一 唐巾着 二ツ
一 継キ(かけ)量眼鏡 壱ツ
一 法眼並提燈 壱連
一 こうがき 壱ツ
一 角櫛 壱枚
一 袷羽織 但表ころうけ 裏ハかな巾 壱ツ
一 羽織後古紫帯 二本
一 綿入綿入入古着物 壱ツ
一 龍牌 七枚 但此代り文銀弐拾壱枚 外.

一 日切 壱ツ
一 燧石袋共 壱ツ
一 竹箸箱 四ツ
一 紫檀珠数 壱連
一 唐綾 二本ニ木
一 唐ござ 四枚
一 幅廣襟綿入綿帽 壱ツ
一 ちりめん帯 壱本

右書面之品沙汰之義ニ付返し遣候旨 但シ右外先申出
閉伊郡平田村之内白浜 一 又右衛門
同郡同村之内日尻 文 伊七郎
同郡同村之内同所 八 久治
同郡釜石村 利吉
同郡同村 長助
小郡田の浜湊村 文治
右漂流人共於長崎表出帆之上松浦河内守殿
於同所ニ村清国人共之上
清国使者 英国船頭
清国月村 山辺喜三郎
同浜 壱人
同心 六人
右之通去ル辰年十一月漂流人清国文月十八日

江戸和尚漂人共不残居所へ持参
一御側御用去唐人附居御側申候
一船より上り候上山と申候
一宅々着共日本より孫と申候
一寧波之国之に至名に同人住候
路之之名按察使唐人住候何と申候哉お知申候
右国之主代之席を務候て尺ト申候
のかり木立印して矢持者居候印写而不及候
白論馬上ニ供奉て南京より帰候て様子に取申候
一何そ金を様子之印ハ候を彼候へ御申之其印ヶ所と存候
一唐銀其之印大さ見候て角様子て大さき之物と申候
一日本にハ之印を中支へ去行と申候

一餘と申事ハ好カウと申候
一悪事ハブハウと申候
一道唐人之名　ソンツウ　と申候
サイクワウ
此方船頭水主之名之事

寶暦二壬申歳季秋晦日於江府写之

久五郎　藤三郎　理兵衛　五兵衛　傳六　文治